

# 文化

## 花と子どももの 画家

いわさきちひろ  
生誕100年

松本 猛 ⑨

ちひろは第2次世界大戦末期の1944年に、満蒙女子開拓義勇隊の書道教師として満州の勃利へ渡る。母の文江は第六高等女学校（現・都立三田高校）の教師から大日本連合女子青年団の主事になり、開拓士結婚相談所所長に就任していた。文江の知人が勃利の女子開拓義勇隊訓練所所長だったことから、ちひろの渡満の話が進んだ。

関東軍に守られた満州は東京より安全という話だったが、現地に着いてみると開拓団の生活

### 開拓団、空襲そして敗戦

## 自立する女性 強い意志と情熱

は想像を絶するほど厳しいものだった。心身とも憔悴するが、幸運にも書道の教える叔父が

勃利に駐屯していた部隊の連隊長であり、彼の官舎に引き取られる。戦況は悪化の一途をたど

り、連隊長の配慮でかろうじて帰国できた。しかし、開拓義勇隊の女性は帰国もかなわず、戦後も悲惨な境遇に陥った。

ちひろの帰国後、岩崎家は45年5月25日の山の手大空襲で家を焼かれ、ほとんどの家財を失う。命からがら生き延びたちひろは松本の岩崎家の実家に疎開する。それから3カ月後に日本は降伏した。

何不自由なく幸せなお嬢さまとして育ってきたが、夫の自殺

開拓団の生活、空襲そして敗戦を経験して、一人の自立する女性として目覚めていった。敗戦によって、すべての価値観がひっくり返る中で、ちひろは新しい社会の動きに関心を持つ。46年1月、戦争に反対して弾圧さ

れていた共産党の演説会への参加をきっかけに、日本の民主化と平和運動の流れに飛び込む。入党し、絵を学ぶ決意を固めると、誰にも告げずに一人上京した。

戦後の東京での生活は容易ではなかったが、人民新聞の記者の職を得て、共産党主催の芸術学校で絵の勉強をする。幸運だったのは、後に原爆の図を描く丸木位里、俊夫妻の知遇を得たことだった。俊の元でデッサンの勉強に励み、日本美術会、前衛美術会に参加するようになる。

ここに掲載する自画像は、上京4カ月後のものだ。終戦直後の自画像は、髪形を整え、美しい顔に描いていたが、この絵からは、自立して生きていこうとする強い意志と情熱が感じられる。

（美術評論家）  
〈土曜日に掲載します〉



「自画像(27歳)」1946年9月11日(ちひろ美術館所蔵)